

美術史学会主催

第12回辻佐保子美術史学振興基金講演会

# 中世からルネサンスにかけての 壁画連作の動的受容

PER UNA PERCEZIONE DINAMICA DEI CICLI DI PITTURA MURALE  
FRA MEDIOEVO E RINASCIMENTO

アンドレア・デ・マルキ (フィレンツェ大学教授)

ANDREA DE MARCHI

(PROFESSORE ORDINARIO DI STORIA DELL'ARTE MEDIOEVALE, UNIVERSITÀ DEGLI STUDI DI FIRENZE)



2025年6月7日 (土)

13:30~16:30 (開場: 13:00)

場所: 京都市立芸術大学 (C棟講義室1) 対面のみ  
イタリア語、逐次通訳付き

協力: 京都市立芸術大学

## 参加登録

会場準備のため、5月31日までの  
参加登録にご協力ください。

<https://forms.gle/LFqBbiJEv4zEndTHA>



# 中世からルネサンスにかけての 壁画連作の動的受容

本講演では、13世紀から15世紀にかけてのキリスト教聖堂空間を特徴づける動的かつ周遊的な受容体験に関する考察を提示する。この時代の聖堂空間は、差異化された階層構造により、歴史的または範例的な物語として、また、ある条件に基づいて方向付けられた経路に沿った「神への巡礼路」(itinerarium in Deum)として意味づけられていた。具体的には、以下の分類に応じていくつかの事例を検討する。

1. 教会に入る際の平信徒の視点
2. 教会から出る際の平信徒の視点
3. 聖職者が教会に入る動き、また教会から修道院・修道会空間へ戻る動きにおける視点
4. 聖堂障壁(ルードスクリーン)の手前と奥とでの受容の違い
5. 距離をもって行われる視認(遠くから見る)
6. 限定された開口部を通じた視点(覗き見る)
7. 向かい合う壁面間の鏡像的な対応関係(視線が交差する構図)
8. 光を反射する素材に見られる変化に富んだ視覚効果(光沢のある金属製品とその設置環境)

## アンドレア・デ・マルキ (フィレンツェ大学・正教授)

イタリア・ピエモンテ州出身、シエナ大学でルチアーノ・ベッローシに師事し、ジェンティーレ・ダ・ファブリアーノに関する博士論文でピサ大学にて博士号を取得。その論文は、1992年に出版された画家のモノグラフの基礎となった。ピサ文化財保護局にて美術史調査官として勤務した後、レッツェ大学で中世美術史の研究員、ウディネ大学およびフィレンツェ大学で准教授を経て、現在はフィレンツェ大学正教授。カメリーノ、ファブリアーノ、グッピオ、プラート、ペルージャ、そして2019年にはフィレンツェのストロツィ宮で開催されたヴェロッキオ展など、様々な展覧会の企画にも携わる。13世紀から16世紀にかけてのイタリア絵画における様々なテーマを研究対象とし、特に、美術地理学、様式と機能の関係、技術文化、作品のオリジナルのコンテクストの復元、托鉢修道会の教会を中心とした空間とイメージの相互作用に焦点を当てている。



会場地図：[https://www.kcua.ac.jp/?page\\_id=175777](https://www.kcua.ac.jp/?page_id=175777)

入口は芸大通りに面しています。